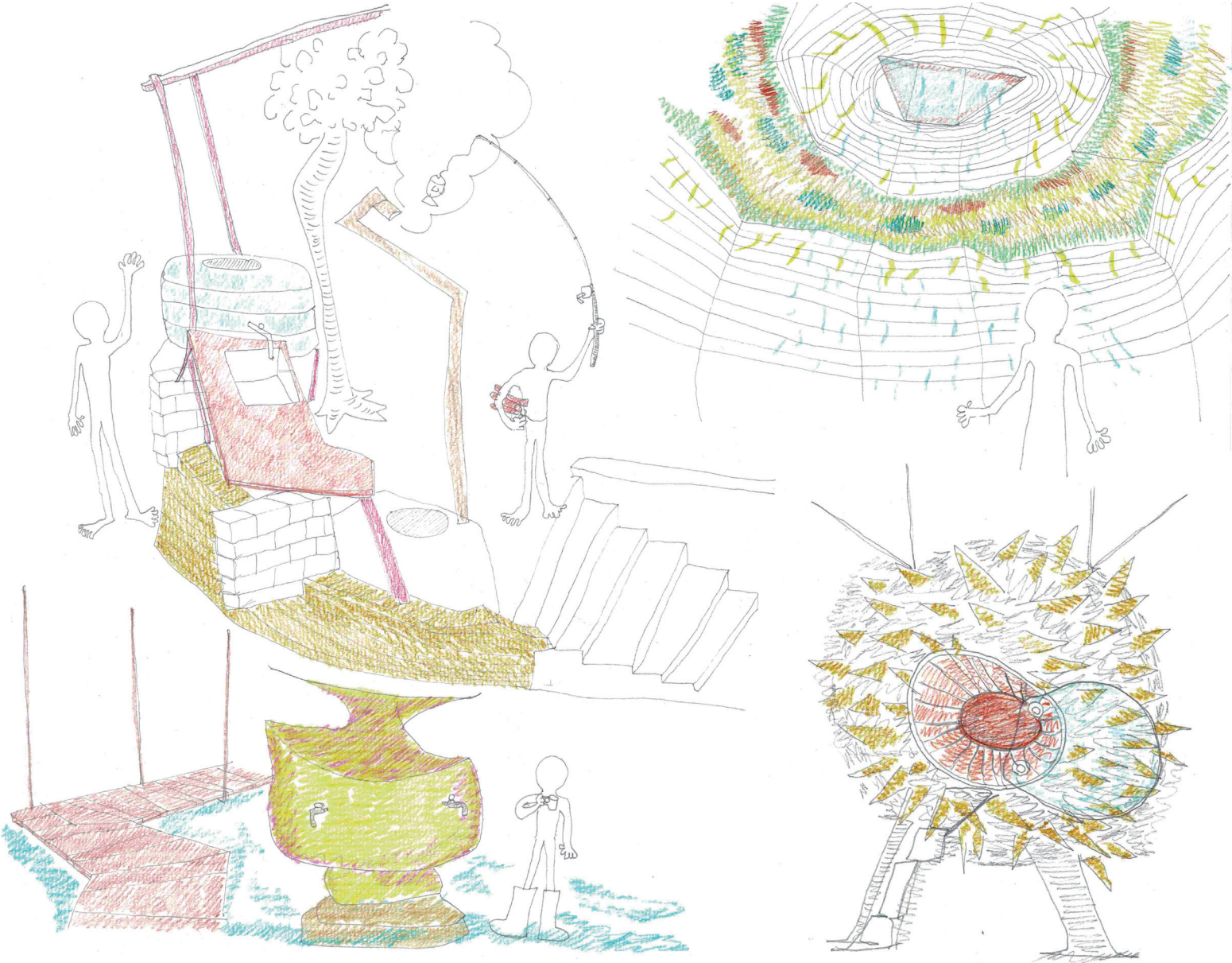


第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展
日本館展示指名コンペティション
展示企画提案書



不気味な場所の生活：

life in the face of the uncanniness of place

| 作家 | 海法圭、佐藤研吾、常山未央、能作文徳、梅沢英樹、川内倫子

| 企画提案者 | 篠原雅武

不気味な場所の生活： life in the face of the uncanniness of place

本展は、人間が危機的時代への対応を迫られる中で生きていかねばならない状況に置かれているという認識のもと、そこで日常生活の支えとなり得る建築のあり方を想像できる場を、「日本館」に建築的な構築物を出現させることによって創出する。また、エコロジカルな危機と隣り合わせて生きるざるを得ない状況を鑑賞者によりリアルに感じてもらうために、建築、写真、サウンドアートを相互連関的に展示することで構成する。

地震や豪雨にみまわれるとき、私たちは、エコロジカルな緊急事態の時代を生きていることに気づく。具体的には、グローバルな温暖化にともなう異常気象、海面上昇といった事態だが、世界気象機関が2025年に出した報告書によると、この傾向は今後5年でさらなる記録が更新されることになるという。豪雨をもたらす土砂災害や海面上昇といった事態は、人間が生活するために構える住処の土台そのものが不安定的になっていること、そこで日常生活のあり方を、さらには生活を支えるものとしての建築のあり方を想像せねばならないことを告げている。自然はこれまでコントロール可能な客体とみなされてきたが、エコロジカルな危機の状況では、その圧倒的な存在感との関わりにおいて人間が自らのあり方を改変するのを要請する、巨大なものへと変貌している。また、2020年のコロナウイルスパンデミックとその後に続く戦争状態において、人の移動や物流が急に途絶えてしまう不安な状況に私たちはさらされているが、これは建設労働者や建築資材の不足という、建築の根幹に関わる問題を提起している。

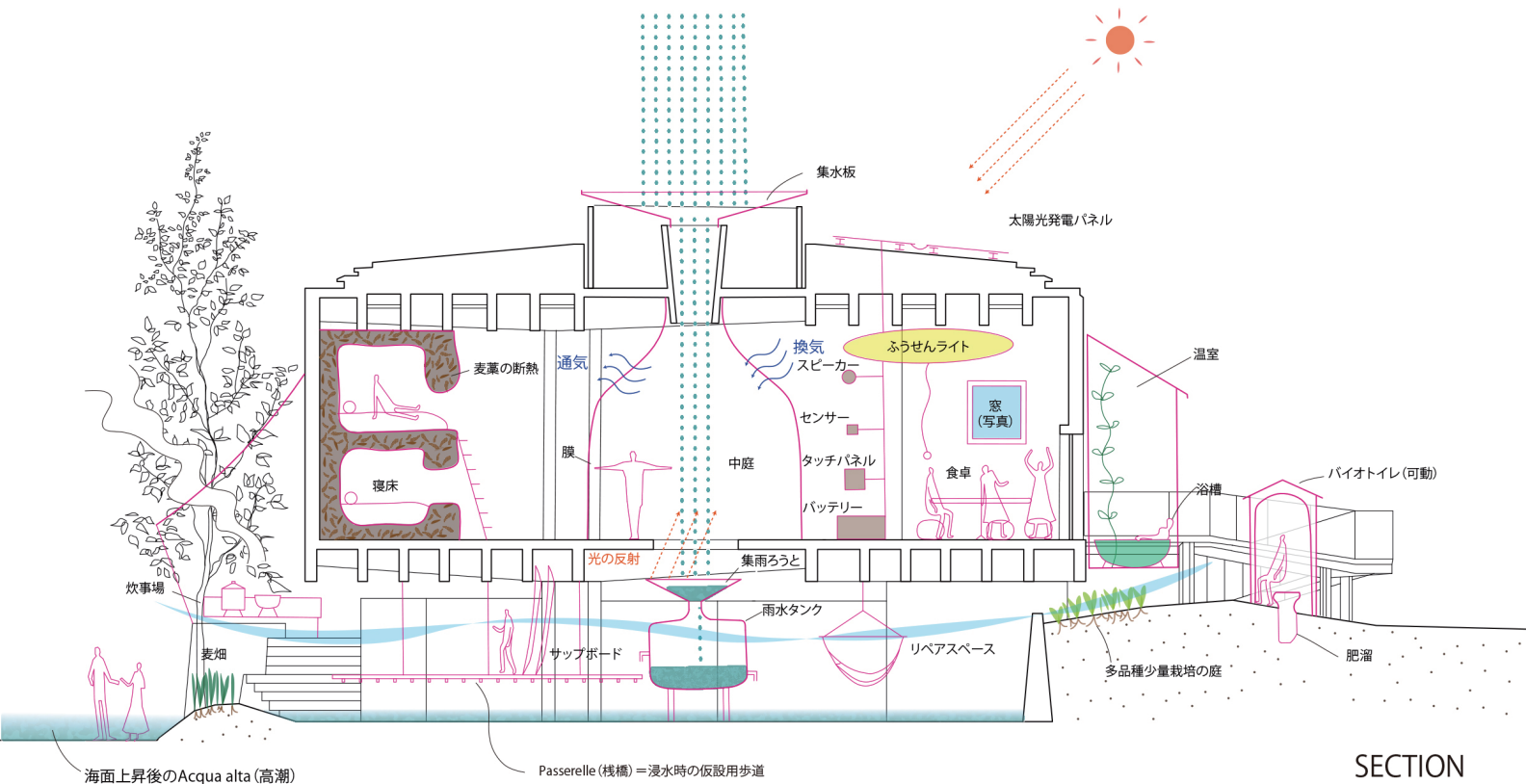
2020年以後に顕在化した現実をその予兆において思考したのが、ティモシー・モートンのような哲学者・思想家である。温暖化が進む世界において、人間は、世界を構成する様々な事物、存在者、それも、人間ならざるものとしての存在者との接点で自らのあり方を再考せざるをえなくなるというそれらの議論は、日本でも、エコロジカルな緊急事態をめぐる思想として受容され、展開されてきた。これに呼応して、建築の側では、多様な存在者を相手に、それらをただ拒否し、無視するのではないあり方で関係を形成することで建築的な事物を作り出す試みが現れつつある。モートンも述べているように、このような時代における建築には、水や空気、土壌などが汚染されていく状況を拒否

することの難しさと、こうして汚染されていく状況とすら共存せざるを得ないという必然性を認めることが要請される。世界の現実の危機を前にして、建築の真の概念と方法をいかなるものとして考えたらいいかという問いに対し、日本館からは、2011年の東日本大震災以後の不安な状況の只中において、建築の拠り所を見出さざるを得ないという難題に立ち向かってきた建築家たちの建築的思考から応答しようできるというのが本展示の見立てである。

本展示では、**建築を含めた人間的な営みを成り立たせるところとしての「場所」の概念に着目する**。モートンは、エコロジカルな危機において私たちが出会うのは、自らの存立の土台にある場所の広大さ、定まらなさ、そして深さであると述べている。モートンのいう場所は、様々なスケールのもとに成り立つ複数の場所を意味している。さらにモートンは、**人間によって構築された場所よりも広大な複数の場所の内側において私たちは己を見出すことになり、この場所が、ノンヒューマンで不気味な次元を内包する**と言うのだが、この見解は、日本の哲学において展開されてきた場所についての概念に近い。実際、西田幾多郎は場所を、身体が身をおくところでありながらその身体を越えた、広大でありつつ深淵を湛えたパラドキシカルなものとして概念化したからである。

以上の哲学的考察との関連で、本展示は、日本館の空間的形象を、人間の日常がそれをとりまく不安定的な状況によって浸透され、ともすれば日常が破綻しかねない様子を表すものと見立てる。天井と床に開けられた穴は、人間の身体との関係でいうと口と肛門に対応するものと言える いうことができる。それは、人間の身体が、それが身をおく場所において外部へと開かれ、外部の諸物によって浸透され得る状態にあるということの形象化(figuration)である。また、ピロティは、日本館の内部空間に対し、床下という下部的な場所の存在を示唆するが、日本館が、それをとりまく敷地と地続きの状態において、他の様々な場所との相互的浸透状態において成り立つものであることを形象化したものと見なすこともできる。その上で**日本館を、危機的状況において生きていくことを可能にする住まいとして捉え直し、そこに建築のための拠り所を、場所の不気味さとの接点で考え直そうとする**。

展示構成について



SECTION

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館を、危機的時代における住まいとして再定義する。本展では、建築家の海法圭、佐藤研吾、常山未央、能作文徳、アーティストの梅沢英樹、写真家の川内倫子が協働し、空間を構築する。

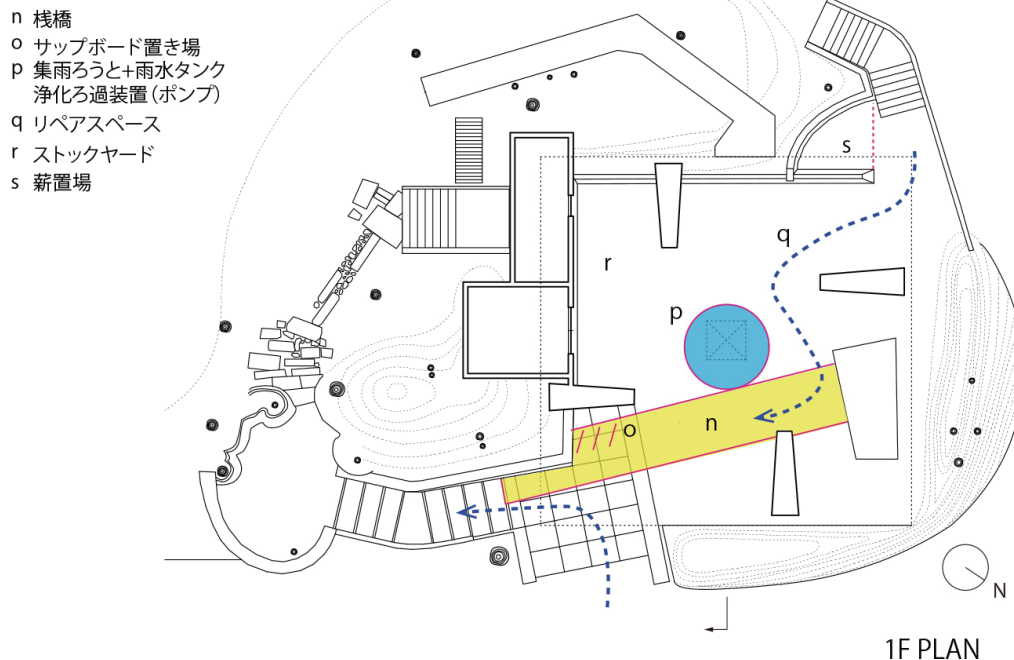
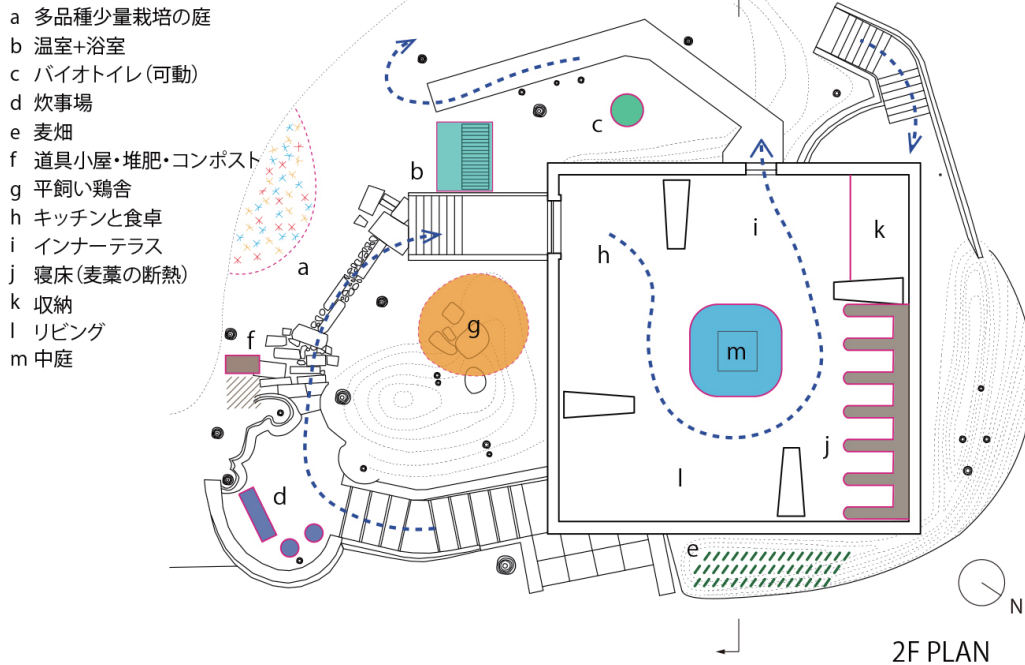
本提案は、ヴェネチアにおけるアクア・アルタ（高潮）や、気候変動に伴う海面上昇による都市の浸水状況を前提とする。日本館のピロティは高床住居として読み替えられ、都市インフラから切り離された孤立状態においても成立する生活環境が構想される。エネルギー、水、食料、廃棄物、衛生といった基盤を自給することで、住まいは再び生存のための装置として捉え直される。

ここで提示されるのは、個別の家族の住居でも、避難所でも、仮設住宅でもない、**複数の人々を受け入れる「場所」としての住まい**である。壁に囲まれた展示室は外界から守られたシェルターとして機能しつつ、同時に内外の関係は閉じられない。天窓と床に穿たれた開口部の関係を通して、光や風、雨が内部に引き込まれ、空間は環境と相互に浸透する。

また、地政学的リスクを背景に石油資源への依存が制限される状況を想定し、断熱材をはじめとする構成要素には自然素材の採用を試みる。家具は現地調達のあるあわせの材料の組み合わせによって制作され、資源制約下における即興的な構築のあり方を示す。

日本館の周囲には、多品種少量栽培の畑や苗を生育する温室が設けられ、食料生産のランドスケープが形成される。炊事場、バイオトイレ、鶏小屋が配置され、生ゴミや排泄物は堆肥として循環する。日本館を貫通した雨水は貯留され生活用水として利用される。太陽エネルギーは照明や各種デバイスを駆動する。

内部空間では、川内倫子の写真が窓として機能し、未来において私たちが生きることになる世界の予示的イメージへの眺めを開く。また、梅沢英樹が、ヴェネチアの潮の満ち引きと同期する環境音楽を制作し、さらにヴェネチアの街中で冠水が頻繁に起こる場所にセンサー装置を設置し、実際に冠水が発生したときその状況や位置を知らせるサウンドロゴを会場内に再生するといった仕掛けを作り出すことで、**危機の状況を生きることのリアリティを前言語的レベルで感じられる状況を創出する**。



作家選定について

本展示は、建築を写真とサウンドアートと相互連関的に展示することで構成される。出品作家の**海法圭**は「空飛ぶマンタ」と呼ばれる薄い膜を東京上空に浮遊させる計画や、新潟の雪室のプロジェクトで大きな現象を自然や人為を問わず様々な尺度で思考する建築家である。日本館の光や雨などの要素を建築的装置へと変換する役割を担う。**佐藤研吾**は、原発事故の被害を受けた福島で活動を続けており、避難指示解除後の飯館村の地域拠点「囃囃倉庫」や、藍の畑作りを軸とするコミュニン「欽藍社」など、震災後も継続的にプロジェクトを展開している。また独自の視点でオブジェの制作を行っており、日本館の住まいのための道具や家具を現地滞在制作する。**常山未央**と**能作文徳**は「西大井のあな」の自宅のプロジェクトで都市の生態系に配慮しつつ、住みながら改修し続けている。エネルギー自給、菜園づくり、堆肥化の仕組み、植物性断熱材の制作を担当する。**梅沢英樹**は、人為と自然の関係性の変容や前言語的な領域における知覚への関心から、サウンド等を用いた制作を行うアーティスト。日本館での環境音楽やサウンドシステムを担当する。**川内倫子**は、日常生活の儚さを主題としつつ、他方で日常のエッジにおいて見い出される超自然的なものの神秘をテーマとする写真家。未来を予感させる窓(写真)を制作する。**篠原雅武**は、哲学的な考察を、建築家やアーティストの実践から示唆を得るなかで発展させているが、その経験を活かし、私たちが生きる未来の様相を想像する場所を、日本館に出現させるための思想的な触媒になることを試みる。